53 (1939).

Nom. Jap. Yakushima-shōjōbakama (Honda 1938).

var. **flavida** (Nakai) Hara, comb. nov.

H. japonica var. *flavida* Nakai in Bot. Mag. Tokyo 47 : 243 (1933)-Honda, l. c. 1679 (1938).

? *Sugerokia nipponica* Ohwi in Bot. Mag. Tokyo 44 : 566 (1930).

? *Heloniopsis nipponica* (Ohwi) Nemoto, Fl. Jap. Suppl. 1058 (1936).

Nom. Jap. Kibana-shōjōbakama (Nakai 1933).

var. **albiflora** (Honda) Hara, comb. nov.

Sugerokia japonica Miq. sensu Koidzumi, l. c. 95 (1930), p. p.

H. japonica var. *grandiflora* Nakai, l. c. 243 (1933), excl. syn. Fr. et Sav.

H. japonica var. *albiflora* Honda, l. c. 1678 (1938).

H. japonica var. *tessellata* Nakai ex Honda, l. c. 1679 (1938).

Nom. Jap. Shirobana-shōjōbakama (Makino 1896).

○クスドイゲの語源 (前川文夫)

この木は西日本には自生して居るが揚子江の中流では里近くの雑木で，枝，殊に幹の下部の枝には針がやたらにあつて，その刺はサイカチのやうな枝打ちの針ではないが，出て居る方向が入り亂れて丁度猬(ハリネズミ)の背中の針を見るやうである。垣根のやうにでもなつて居たらくゞることなど思ひもよらない。その地方ではハリネズミも珍らしくないので兩者の間の聯想も可能なのである。日本内地には居ないが西日本は中國，朝鮮と交通も盛でこのおかしな動物を見る機會はかなりにあつた事だろう。猬の古名を類聚和名抄でみると「クサフ」といふとある。イゲはイガ(毬)で針のある植物に，殊に西日本には數種の刺のある植物に夫々名を止めて居ることトビトリイゲ(ジヤケツイバラ，肥後)，ヒヤーイゲ(テリハノイバラ，肥後)，ガンガライゲ(サルトリイバラ，豐前)，サルカケイゲ(同上，肥後)，カカライゲ(同上，薩摩)，ガメイゲ(同上，筑前)，サルトリイギ(同上，周防)，タロノイゲ(タラノキ，大和)，ソンノイゲ(カカツガユ，長崎)，シロイゲ(バラ，長崎)，イゲボタン(バラ) 等々の如くである。そこでこのクスドイゲもその刺の在り方からみてクサフを思ひ，クサフノイゲが轉約してクスノイゲ，さらにクスドイゲとなつたやうに思へる。クスノキのクスとは關係はないであらう。

上記のソンノイゲはカカツガユの異名とされて居るが，一つ氣にかゝることはツンベルグ氏の日本植物誌 (1784) の末尾に所屬不明の日本植物を百種程擧げて記載も多少付けてある中 (355 頁) に，ソンノイゲ (Son no Ige) がある。そして葉には鋸歯があり卵形であることや，針は紫色を帶びて居るなどと書いて居る。カカツガユの葉は楕圓形

に近く全緣であつて時にきれ込が出來ても鋸齒とするには大きすぎる。針も別に特別の着色がなかつたと思ふ，クスドイゲの葉は上の記事と一致するし又針は莖と同一色で赭赤色をして居て目立つ。してみるとツンベルグ氏のソンノイゲの內容はクスドイゲではないか。これはツ氏の聞きまちがいか，日本人の敎へちがいか，そうでなければ長崎にはソンノイゲの異名もあつたのであらうか。なほソンノイゲの語源はまだわからないが，上記の如きクスドイゲだとするとわかるやうだ。それはソンはソニの轉でソはマソホノスゝキのソであり，ソニトリのソであつて，ソホ又はソホニ即ち染める土，色土から赤土色をさし，赤味のある土色の針のある植物の意でソホニノイゲからソンノイゲとなつたやうに考へられるからである。

○ノササゲの地下莖（前川文夫）

ノササゲ（*Dumasia truncata* S. et Z.）は中々澁味のある山草である。多年生で年々蔓が延びてはすつきりした葉をつけ，蒼碧色の粉を吹いた可愛らしい豆が出來る。必要があつてこの種子を播いたことがあるが，副產物として地下莖の面白い伸び方がわかつたのでこゝに記す。從來はたゞ多年生とのみ記してあるが近い屬のクズやホドイモとは多年生の形式が違つて居るのである。種子は相模神武寺で昭和 20 年多採集，これを翌年春に四寸鉢に淺く播いた。發芽の際には子葉は種皮から出ない，即ち地下生である。地上部がのびはじめた頃から間もなく子葉腋から夫々一本の徑 2 mm 許りの紐狀の地下莖が伸び出す。白くて一見軟かさうだが存外軟骨質であり，莖面には鱗片葉を疎に互生する。その一個は往々合着もするが多くは托葉2個分から成つて居る。この地下莖は垂直に近い傾斜で鉢の底の方に向つて居た。地上部は花をつけるに至らずに多を迎へて枯れた。さて本年（22年）春になつても一向芽が出ないので，一年生の草かと疑つたりしたが，6月下旬になつてやつと芽が出て來た。そこで鉢をひつくりかへして見たところ，土の中には枯れた地下莖の殘りが僅かにあるだけで鉢の底に太い（徑 2mm 位）如何にも蛔蟲が居るやうな印象を持つた地下莖がはりついて居る。分枝したものもありその枝の先は昨年の地下莖の先端と全く同樣な形と色とであつた。地下莖の途中から地上莖が側枝として出て直上して居るが，地下莖の兩端は共に枯れて腐つて居た。これは多の寒さで鉢の側壁が凍つたからそれでやられたのであらう。後端は前年の急傾斜で下つて來た地下莖が鉢が小さいために底で頭をうつて止むなく急角度で曲つたことを示す形骸を殘して居た。これからみて，ノササゲでは地下莖は子葉腋から伸びる。そして 20—30 cm の下方迄もぐつてから橫走，單軸分枝をなしてその先端は決して地上莖とはならず橫走をつゞけ，後端は次第に枯れて行く2年生，即ち多の2年生である。一方地上莖は常に側枝として出て，この部分は夏の1年生である。クズやホドイモの地上莖の少くとも下部が殘存しては枝を出す一方肥大して行く**木本的多年生**に對して，ノササゲは2年生の部分が交代繼續する**交代的多年生**であることを示す。野外では地下莖の深いために中々掘つて見る機會がないので眞相が判らないのであらう。